

トビウオ通信 (H29 第 3 号)

<http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> (TEL 0855-22-1720)

《平成 29 年度上半期浮魚中長期漁況予報》

平成 28 年度第 2 回対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類長期漁海況予報 (H29 年 3 月 28 日発表) から、山陰沖のまき網漁業が対象とする主要浮魚の平成 29 年度上半期 (4~9 月) の中・長期的な漁模様の予測をします。

山陰沖における漁況(来遊)予報 [平成 29 年度上半期(4~9 月)]

マアジ:前年を上回る

マサバ:前年並みか前年を下回る

カタクチイワシ:前年並み

ウルメイワシ:前年並み

マイワシ:前年並みか前年を上回る

※ 本文中で「上半期」は 4~9 月、「下半期」は 10~翌年 3 月 (平成 28 年 3 月は速報値)、「平年」は過去 5 ヶ年の平均値を示します。

マアジは前年を上回る

東シナ海~日本海南西海域の漁況

東シナ海~日本海南西海域における大中型まき網によるマアジの漁獲量は、増減を繰り返り、2 万~4 万トンで推移しています(図 1)。

鹿児島県から山口県までの沿岸域における平成 28 年 11 月~29 年 1 月の漁獲状況は、前年・平年を上回りました。また直近までの漁獲状況から今後は前年・平年並みになると予測されています。

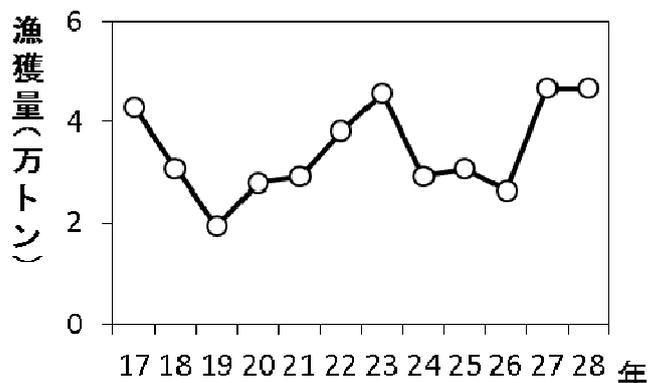


図 1. 東シナ海~日本海南西海域 (大中型まき網)によるマアジ漁獲量の推移

山陰沖の漁況と今後 島根県の中型まき網によるマアジの漁獲量は平成 16 年度以降、2 万~4 万トン程度で推移しています(図 2)。平成 28 年度下半期は 12,930 トンの漁獲があり、前年同期 (6,949 トン) の 186%、平年同期 (13,388 トン) の 97%でした。

H28年の漁獲の主体はH26年生まれ（H28年時点2歳魚）が中心で、上半期の漁獲量は不漁だった前年並みでしたが、下半期は高い水温が影響したためか前年を上回り、平年並みとなりました。

今後の漁況は、漁獲の主体となる1歳魚（大きさ15～20cm：H28年生まれ）と2歳魚（大きさ20～25cm：H27年生まれ）の山陰沖への来遊状況と、夏季以降漁獲対象となる0歳魚（大きさ5～15cm：H29年生まれ）の加入状況によって決まります。例年上半期は1～2歳魚が中心で漁獲されています。また1・2歳魚の来遊状況は、山陰沖の海水温の分布状況の影響を大きく受けます。

平成28年の水温状況は、9月～10月は台風の影響の為やや低め～平年並みでしたが、年間を通して高めで推移しました。0歳魚の加入は例年通り6月頃から見られ、マアジ新規加入量調査※では加入量指数が2.20と高い値を示しました（図3）。

マアジの成長に影響を及ぼすといわれている今期の山陰沖を含む日本海西部海域の50m深水温の推移は、対馬暖流域・沿岸域の水温がやや高めと予測されていることから、山陰沖もそれに準ずると考えられます。また、今期に1歳魚となるH28年生まれの加入状況は、直近までの漁獲状況とマアジ新規加入量調査の結果から前年を上回ると予測されます。これから山陰沖に加入してくる0歳魚の状況は今後調査予定ですが、前年並みとすれば、全体の来遊量は前年を上回ると予測されます。

※マアジ新規加入量調査：山陰沖へのマアジ0歳魚の加入量を早期に把握するための調査です。

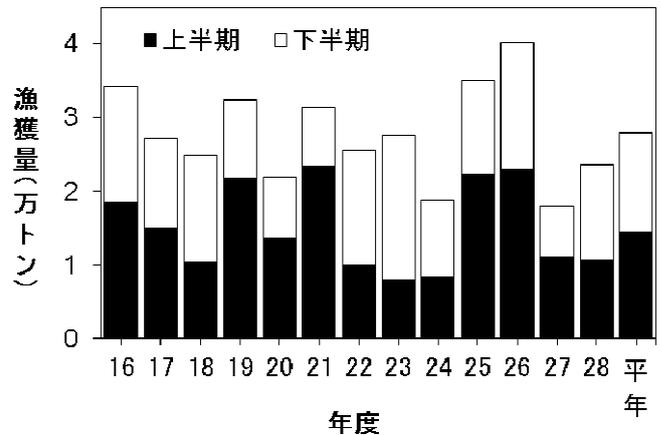


図2. 島根県中型まき網によるマアジ漁獲量の推移（平年はH23～27年の平均値）

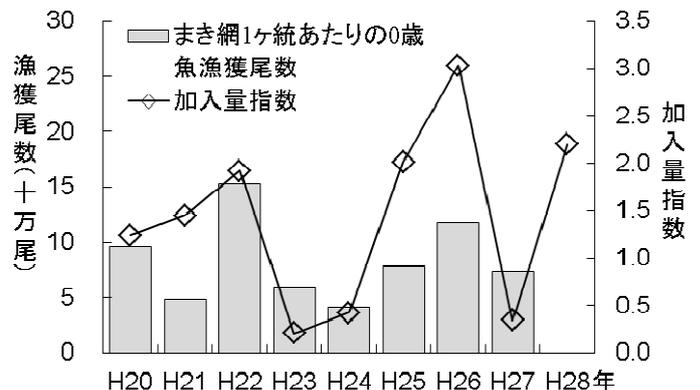


図3. マアジ新規加入量調査による加入量指数と6～12月におけるまき網（境港）1ヶ統あたりの0歳魚の漁獲尾数（H28年は未集計）

マサバは前年並みか前年を下回る

東シナ海～日本海南西海域における大中型まき網によるマサバの漁獲量は、平成22年から減少傾向にあります。平成27年の漁獲量は4万トンとやや増加しましたが、平成28年は再び減少しました（図4）。

島根県の中型まき網によるサバ類の漁獲量は、盛漁期にあたる下半期の経年変化をみると、5千～2万トンの間で増減を繰り返して推移しています（図5）。平成28年度下

半期の漁獲量は 19,692 トンで、前年同期（14,148 トン）の 139%、平年同期（11,987 トン）の 164%でした。

例年、4月～9月の漁獲量は低調に推移しますが、1歳魚（25～30cm：H28年生まれ）が漁獲の主体となり、夏以降は0歳魚（15～20cm：H29年生まれ）も漁獲されます。

1歳魚の資源水準は、前年を下回るとされています。また、0歳魚の資源水準は予測が困難ですが、親魚量の水準や初期生残に関わる環境要因（海水温がやや高めのため初期生残条件がやや不利）からみると前年を下回ると予想されています。しかし、島根県においては直近における漁獲量は好調を維持しており、このことから島根県への来遊量は好調だった前年並みか前年を下回り、平年を上回ると考えられます。

カタクチイワシは前年並み

島根県の中型まき網によるカタクチイワシの漁獲量は、近年減少しています（図6）。

平成28年度下半期の漁獲量は597トンと、前年同期（2,793トン）の21%、平年同期（3,417トン）の17%でした。

今後の漁況は、漁獲の主体となる0歳魚（大きさ5～10cm：H29年生まれ）と1歳魚以上（大きさ12～14cm：H28年以前生まれ）の来遊量で決まります。カタクチイワシ対馬暖流系群の資源量は、近年低い水準で横ばいとなっており、1歳魚は前年を下回ると判断されています。近年の山陰沖では、本種は3～5月に漁獲が集中する傾向にありましたが、平成29年は不漁であった昨年と同様3月までほとんど漁獲されていません。5月以降に近年の傾向どおり漁獲量が減少した場合、結果として島根県への来遊量は不漁であった前年並みになると予測されます。

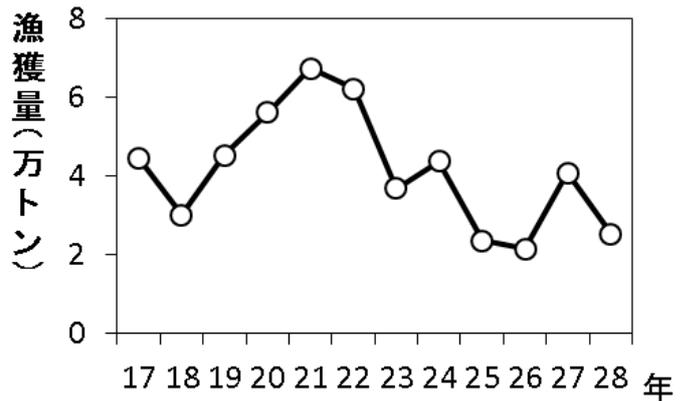


図4. 東シナ海～日本海南西海域（大中型まき網）によるマサバ漁獲量の推移

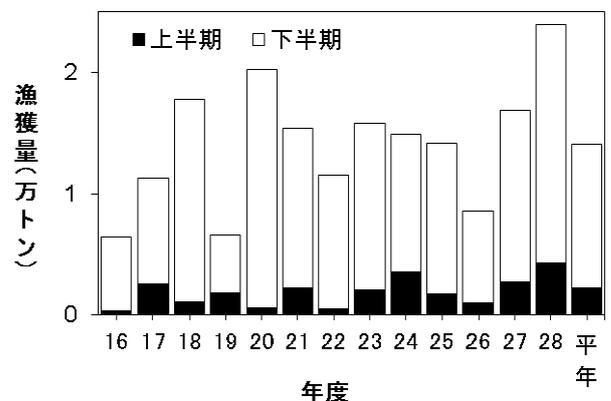


図5. 島根県中型まき網によるサバ類漁獲量の推移（平年はH23～27年の平均値）

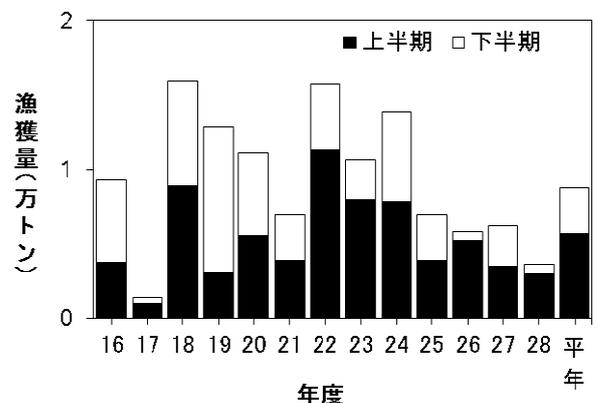


図6. 島根県中型まき網によるカタクチイワシ漁獲量の推移（平年はH23～27年の平均値）

ウルメイワシは前年並み

島根県の中型まき網によるウルメイワシの漁獲量は、平成23年度は1万6千トンの漁獲がありましたが、その後は減少しています。

平成28年度下半期の漁獲量は1,369トンと、前年同期(3,224トン)の42%、平年同期(7,115トン)の19%でした。

今後は、1～2歳魚(大きさ18cm以上：H28年～H27年生まれ)と夏以降の漁獲に加わる0歳魚(大きさ5～15cm：H29年生まれ)が漁獲の主体となります。平成28年の推定産卵親魚量は不漁であった前年を上回っているものの、直近までの漁獲状況は不漁であることから、今期における島根県への来遊量は、前年並みになると予測されます。

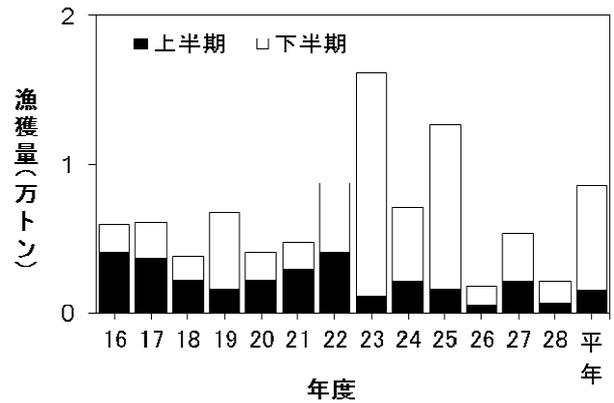


図7. 島根県中型まき網によるウルメイワシ漁獲量の推移(平年はH23～27年の平均値)

マイワシは前年並みか前年を上回る

島根県の中型まき網によるマイワシの漁獲量は、近年回復傾向にあり(図8)、平成26年を除いて2～3万トンで推移しています。

平成28年度下半期の漁獲量は8,288トンと前年同期(4,853トン)の171%、平年同期(6,493トン)の128%となりました。

今後の漁況は、漁獲の主体となる1～2歳魚(大きさ15～20cm：H28年～H27年生まれ)と夏以降の0歳魚(大きさ15cm以下：H29年生まれ)の来遊量で決まります。H27年生まれ(2歳魚)の資源量は前年を上回り、H28年生まれ(1歳魚)は前年並みの資源水準であると考えられています。また、0歳魚の予測は困難ですが、直近の漁況から前年並みであると推測され、好漁が続いていることから今期における島根県への来遊量は前年並みか前年を上回ると考えられます。資源動向の変化が激しく予測の難しい魚種ですが、島根県にとって重要な水産資源であるため、今後の動向を注視する必要があります。

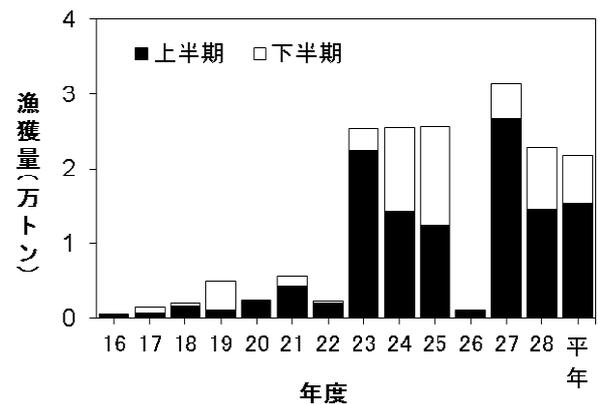


図8. 島根県中型まき網によるマイワシ漁獲量の推移(平年はH23～27年の平均値)